

郷土芸能はだれのもの？

—現代韓国農村における民俗伝承の一側面—

本 田 洋

- 一、はじめに…民俗の再認識と民族文化の創造
- 二、K里の概況とSクツの現状
- 三、固有性の基盤…農民の文化と両班の大伝統
- 四、農村社会の変容とSクツの再評価
- 五、おわりに…国民国家の中の農村の民俗伝承

一 はじめに…民俗の再認識と民族文化の創造

本論の目的は、韓国全羅北道南原郡P面K里に伝わる民俗芸能Sクツの記述・分析を通じて、韓国の一地方の農村に固有な民俗の伝承が、現在どのような社会的、あるいは政治、経済的な基盤の上に成り立っているかを検討することにある。

Sクツは、現在、K里で毎年陰曆七月二十五日（ペクチュン *paekchung* とよばれる農村の伝統的な休日）に開かれる地域祝祭的な行事の一環としてK里住民自身により演じられている。祝祭的な行事の一環とはいったが、むしろこの行事の核心がSクツにあり、それ以外の行事はSクツ

に付随するものであるという方が正確かもしれない。その演目構成は、三組に分かれた農楽隊が三叉路で合流し、旗歳拜、堂山祭、村の共同井戸での儀礼を行なった後、童子の出生、成長過程を動作によって描写し、最後にキワバプキ（瓦踏み）で締めくくるといふ、韓国の他の地域に類を見ない独特なものである。かつて娯楽が少なかった時代にはK里やその近隣村落の村人の数少ない楽しみの一つであったろうことが容易に推測できる。

このような独特な演目構成をとる民俗芸能であるが故に、Sクツは現在、K里や周辺村落の住民だけではなく、南原地域の行政当局者、民俗愛好家、さらには韓国の文化財行政担当者や民俗研究者から、かなりの

注目を集めている。行事の様子がマスメディアを通じて南原、全羅北道一円や全国に広く報道されることも、今では決して珍しいことではない。それ故に、K里の住民は、SクツをK里の自慢にしているばかりでなく、Sクツが南原地域、全羅北道、ひいては韓国を代表する民俗芸能である意識しているようないさえある。同時に、南原地域の行政当局者や民俗愛好家、さらには中央の文化財行政担当者や民俗学者も、しばしばSクツを南原固有、あるいは韓国固有の民俗であると語りさへする。

ここには、今日の韓国農村の民俗文化(folk culture)の伝承をとりまく二つの状況がある程度集約的に現れている。一つは西欧(または、自国より早く近代化を成し遂げた隣国日本)をモデルとした近代化、あるいは急速な産業化や経済発展に対する自己反省の裏返しである民俗の再認識、再評価であり、もう一つは、「われわれ固有の民俗」という語りに見られる、民俗文化を媒介とした一種の自意識(あるいは、集合的なアイデンティティ)形成の萌芽と、それが形成される場の重層性である(cf. 関本一九九四^a)。

ここまで特に断りなしに用いてきたが、地方や民間に伝えられてきた民俗文化を「民俗」と認識することには、近代という時代性を帯びた認識の転換が隠されている。また、地方や民間の個別の民俗文化的事象を「民俗」と同定することは、韓国社会においては、多分に独特の価値付けをともなう行為である。

朝鮮内外の研究者による朝鮮半島の各地方あるいは(エリートではない)諸集団の民俗文化を論考の対象とする学が制度的な外観を備えるよ

うになったのは一九三〇年代のことである(cf. 朝鮮民俗學會一九三三、李杜鉉一九八三・二九)。この民俗学に見られる認識の特徴は、近代という時代の中での民俗文化の変容を「固有民俗」の「消滅」と捉えた点にある。朝鮮半島における最初の民俗研究者の集まりである朝鮮民俗學會の機関誌『朝鮮民俗』の創刊辞に、次のような興味深い一節がある。

「固有民俗資料は、一つ二つずつ湮滅している。小川のせせらぎや鶏の鳴き声を伴奏にうたった純朴な民謡は自動車の爆風に消えてしまひ、草童の『サニョンファ』は治道の『ダイナマイト』の音とともに俗謡『アリラン』に変化した」(朝鮮民俗學會一九三三・一一)。

このような消えゆく「固有民俗」に対するノスタルジックな語り口に如実に現れているように、彼らの対象認識には、近代化や産業化(あるいは開発)によってもたらされた事物との対比の下に、近代以前の民俗文化を構成していた事物のうちで消えつつあるものに対して、近代性からは見出しえない何らかの良き価値を付与しようとする傾向が強くあった。そしてこの民俗学の対象たる(「固有」民俗)とは、単に前の時代の失われつつある民俗文化を意味するのではなく、むしろ自我の近代化しえない部分の投影像とでもいうるものであった。

独立後の韓国では、一九六〇年代中盤以後産業化が急速に進んだ。その過程で、村落地域から都市地域への人口流出も急増し、急激に膨張し近代的な外観を備えるようになった都市の住民の間で、従来の生活文化との乖離が顕著になっていった。そして、「消えゆく民俗」の内に産業化

や発展からは疎外されている何かしらの良い価値を見い出そうとする認識の仕方が、一九三〇年代に成立した朝鮮民俗学の流れを引く韓国民俗学者のみならず、都市の知識人や学生、さらには都市の一般市民の間にも次第に広まっていった。一九六〇年代末から主に体制批判的な学生の間で流行した仮面劇サークル活動などの実践活動や、民具・民画ブーム、民俗飲食店の流行などの生活への応用という形をとって展開した、この（旧来の民俗文化から乖離した層による）「民俗」の再認識・再評価の動きは、一九七〇年代後半以降にはすっかり定着した（伊藤一九八五・二七〇―一六）。また、テレビ、ラジオや新聞、雑誌というマスメディアも、民俗学者の啓蒙的発言や生活運動の紹介、ならびに消えゆく「民俗」の現在を盛んに取りあげた。そして、「民俗」は決して旧式で価値の低いものではなく、むしろ西欧的な文物には見られない民族精神的な価値や審美的価値、あるいは実用的な価値を有するもので、現代的な生活の場でも積極的に活用してゆかなければならないという意識が、この国の人々、特に都市の住民の間に強く抱かれるようになった。

「われわれ固有の民俗」という語りに見られる民俗文化を媒介とした自意識形成の萌芽と、それが形成される場の重層性という論点は、端的には国家行政の中央集権的なハイアラキー・システムに従った公民の分類、統治と、このような行政システムに立脚する自意識の形成、いいかえれば国民、道民、郡民などという集合的アイデンティティ形成の問題に整理できる。第一の問題は、国家―道―郡―面―里という行政単位の階層的序列に則って国家の公民が分類・統治され、（中央集権的な）国家が専有する資源や情報もこの階層のラインを通じて分配されるというこ

とで概略は把握できると思われるので、詳細な説明は省く。第二の問題は、韓国のように文化的等質性の極めて高い集団により近代以前から集権的な政治共同体が形成されていた場合にはしばしば自明、所与のことであるとみなされがちであるが、このような政治共同体の成員が国家の機関により均質的な国民として把握されるようになったのは決して古いことではない。特に、集合的かつ重層的なアイデンティティ形成が民俗文化を媒介として促進されるようになったのは、大韓民国成立以後のことである。

国家的な機関、あるいは国家の明示的、暗示的目標を体现する諸個人が、国家によって境界付けられる空間（国家の領土）や時間（国家の歴史）の内に存在する諸集団に固有の文化的事象の一群を収用（appropriation）し、それを材料として、恣意的に境界付けられた歴史や領土に対応する境界を備えるように新たな文化体系（国民文化 national culture）を意識的、無意識的に再構築する過程は、近代に成立した（あるいは再組織された）諸国家にかなりの程度で普遍的に見られる現象である（cf. Poster 一九九一、関本他一九九四）。このような国民文化の生成は、「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体」（Anderson 一九八三：一五）である国民（nation）の集合的アイデンティティの形成を可能にする、唯一ではないが相当に重要な装置の一つであろう。韓国の場合、国民国家の形成以前の段階で空間や時間の境界付けはかなり明確に存在しており、かつ階層的な行政システムもある程度形作られていた。残された問題は、地域的、階級的、民族的な差異意識が顕著に見られる国家領域内の住民の間に、均質的な国民という集合的なアイデンティティを醸

成することであり、その手段の一つとして既存の民俗文化の国民文化（韓国ではしばしば「民族文化 *minjok-munhwa*」¹）と¹といういい方で表現される）への再編成（民俗文化の〈国有化 *nationalization*〉）が進められた。

一九六〇年代に入り、全国民俗芸術競演大会の年例化（一九六一年）、文化財管理局の発足（一九六一年）、文化財保護法の制定（一九六二年）、文化公報部の設置と文化行政の一元化（一九六八年）、全国民俗総合調査の開始（一九六八年）などの一連の事業を通じて制度的に確立されるようになった国家による民俗文化の発掘、記録、保護、育成事業は、このような国家主導での「民族文化」の再編成の萌芽と見なすことができであろうが、それが制度的にも財源的にも本格化するのには、一九七〇年代中盤以後のことである。一九七三年に公布された『文芸中興宣言』によって、「永久に残る遺産を開発し民族的正統性を引き継ぎ、今日の新しい文化を創造する」という国家的任務が明確に提示され、その任務を担うべき機関として発足した韓国文化芸術振興院（以下、文芸振興院と略す）により、国民文化育成のための様々な事業が推進されていった。さらに、一九八〇年に出帆した第五共和国体制下では、「伝統文化を継承、発展させ、民族文化を暢達する義務を国家が負う」ことが憲法にも銘記されるようになり、民族文化育成事業はその規模をますます拡大していった（文化部一九九二、文化財管理局一九九四）。

Sクツが地方の国立大学に籍をおく民俗学者によって中央に紹介され、全羅北道の代表として全国民俗芸術競演大会に出場し最優秀賞を受賞し

たことを契機に、全国的に注目を浴びるようになったのは、まさに、上に述べたような都市住民による民俗の再認識、再評価の気運が高まり、国家による民族文化育成事業が本格化し始めた頃のことであった。そして、このような時代に一躍脚光を浴びることによって、その固有性の社会的基盤が徐々に崩れつつあったSクツの伝承のあり方は劇的に変化していく。以下の章では、まずSクツ伝承の社会的基盤であるK里の概況とSクツの現在の行なわれ方を記した上で（二章）、Sクツがどのような社会的、文化的脈絡の内に行なわれていたか、いかえればその固有性の社会的、文化的基盤を、入手しえた各種資料をもとに再構成する（三章）。その上で、全国民俗芸術競演大会への出場と大統領賞受賞を境にSクツの行なわれ方がどのように変わっていったかを、「民俗」の再認識と民俗文化の国有化を軸に検討してゆきたい。

二 K里の概況とSクツの現状

二一 K里の概況と過疎化、高齢化

K里は、韓国全羅北道南原郡P面南部に位置する世帯数一一〇戸、人口三八二名（一九八九年七月時点のP面事務所²の統計による）の法定里である。南原郡庁が所在する南原市旧市街から北へ約九km、一日に二〇本運行されているバスで約二〇分程の距離にあり、住民は買い物や農産物の個人的な売買、娯楽会食、病気の治療などで南原市街地に出ることも多い。法定里K里はYマウル、Uマウル、Kマウルの三つの行政区里によって構成されており、世帯数と人口は、Yマウルが四五戸一五四名、Uマウルが二八戸一〇二名、Kマウルが三七戸一二六名である。いずれ

も構成世帯のほとんどは農業を主たる生業としているが、Yマウルには雑貨・食料品を売る小さな店を経営している世帯が二戸、Uマウルには蜂蜜の加工場を経営している世帯が二戸、Kマウルには牛の飼育場を持つ世帯が一戸あり、また、老齢年金や息子からの仕送りに家計を依存し、農業は若干の自家消費用の作物を栽培する程度しかおこなっていない世帯もいくつかある。農閑期に現場労働に出る男性や暇なときに畑作物を南原市内の公設市場に売りにゆく主婦も近年増えている。

K里の住民の多くは、朝鮮時代後期に南原地方で在地士族層を形成していたいわゆる両班氏族の子孫たちである。その中でも、彦陽金氏、廣州安氏、恩津宋氏の三姓に連なる者が比較的多く居住している。この三姓は、いずれも南原地方への入郷祖を頂点とする門中（「大宗中」と呼ばれている）の墓所や祭閣をK里近在に有しており、K里はこれら三姓の南原大宗中の根拠地であるとなすことができる。三姓世帯の世帯主の入郷祖からの世代深度は以下の通りである。

彦陽金氏 入郷祖から一三一―一七代

廣州安氏 入郷祖から一二一―一三代

恩津宋氏 入郷祖から八一―一〇代

K里、特にKマウルの一集落には、かつてこの地方では両班には列せられてはいなかった氏族の子孫も一部居住している。しかしそれ以上に、両班に列せられていた氏族の子孫の中でも、漢籍の素養を備え、いわゆる儒教的な行為規範を遵守し、郷校や書院に出入りして儒林と交わり、自身も儒林に列せられていたような者は、ごく一部であった。また、経済的な格差も過疎化以前には相当に大きかったようで、同じ入郷祖の子

孫といえども、三四十マジギの田畑を所有し作男をおいたり田畑を小作に出したりさらには余剰作物を貸し付けたりして相当な財を蓄積していた「富者 *paja*」もいた反面、このような富者の土地を小作したり、作男をしたりしていた者もいた。上に述べた門中の財産も量的に少ない上に大半が祭祀用に準備されたもので、田畑の耕作権やそこからの収益を成員間で分配するような現象は一般には見られなかった。財産の所有や生業の経営は、長男残留直系家族的な構成をとる世帯が単位となっていた。

一九六〇年代中盤以後の産業化・人口都市化の進行の急速化にともない、韓国の農村地域では過疎化と残留人口の高齢化が急激に進んだ。P面やK里は、全国的に見てもこのような傾向が特に顕著であり、表2―1のように、一九六五年から一九九〇年までの二五年間で、K里の世帯数は三九・二％、人口は六八・九％減少した。この数字は、世帯単位での離村とともに、世帯の構成員の一部が他の成員を残して村を離れる離村が並行して進行したことを示すものであり、表2―2の年齢別人口構成からもうかがえるように、後者のような離村形態によって、一五歳から五〇歳の間の現在若年・中年層をなす人口が特に多く離村した。その結果、世帯主の既婚の長男が親である世帯主と同居しているケースは、Yマウルを例にとれば二八世帯中わずか九世帯で、残りのケースではいずれも長男夫婦が親と別居して都市地域に独立した世帯を構えるようになっている。さらに、そのような場合に次男以下の息子夫婦を手元において農業を継がせようとするような志向もあまり見られない。事実、上にあげた二八世帯から長男夫婦が同居している九世帯を差し引いた一九世帯のうちで、次三男夫婦のいずれかが世帯主と同居しているのは四世

表 2-1 K里、P面、全国農家の家口数、人口、家口規模の推移

年度	65	71	74	79	85	90	65-90増加率
家口数(戸)							
K里	167	161	153	148	114	103	-39.2%
増加数	-6	-8	-5	-34	-11		
年平均	-1.0	-2.7	-1.0	-5.7	-2.2		
P面							-40.3%
全国農家							-29.5%
人口(人)							
K里	987	929	871	740	415	307	-68.9%
増加数	-58	-58	-131	-325	-108		
年平均	-9.7	-19.3	-26.2	-54.2	-21.6		
P面							-65.4%
全国農家							-57.9%
平均家口規模(人/戸)							
K里	5.9	5.8	5.7	5.0	3.6	3.0	-49.5%
P面	5.9	5.6	6.0	5.4	4.0	3.4	-42.0%
全国農家	6.3	5.9	5.7	5.0	4.4	3.7	-40.2%

(K里、P面の家口数・人口は、いずれも『南原郡統計年報』による。全国農家の家口数・人口は、『韓国統計年鑑』による。平均家口規模、並びに増加数、増加率は、これらの数値に基づいて筆者が算出した。)

表 2-2 Yマウル年齢層別人口(1989.8.)

年齢層	男(人)	女(人)	計(人)	構成比(%)
0-4	4	0	4	2.6
5-9	7	15	22	14.2
10-14	8	12	20	12.9
15-19	3	5	8	5.2
20-24	0	0	0	0.0
25-29	2	4	6	3.9
30-34	2	5	7	4.5
35-39	7	4	11	7.1
40-44	2	1	3	1.9
45-49	1	5	6	3.9
50-54	10	10	20	12.9
55-59	4	4	8	5.2
60-64	5	4	9	5.8
65-69	3	6	9	5.8
70-74	3	6	9	5.8
75-79	2	4	6	3.9
80-	2	5	7	4.5
計	65	90	155	

帯のみである。そのような世帯でも、子供は大体高校を卒業すると都市の大学に送るか都市部で職を探させるのがほとんどで、手元に残して将来的に農業を継がせようとするケースは全くといっていいほどない。よって、高齢者の夫婦家族世帯の場合、夫婦の一方が死ぬと、その配偶者は都会の長男を頼って村を離れ、農家世帯は消滅してしまうのが通例である。⁽²⁾

二―二 Sクツの現状

筆者はK里Yマウルでの滞在調査⁽³⁾を始めた一九八九年に初めてSクツを目にし、その後、九〇年、九二年、九三年、九四年の都合五回、この

芸能を見る機会を得た。実際の観察を通じて得た印象に従えば、この農村でSクツが毎年行なわれるようになってから相当の年月が経過したことは確かであるように思えた。その反面、韓国の他地域で行なわれている民俗芸能と同様に、韓国社会の産業化や都市化の過程で、その行なわれ方にかんがりの変化が生じていることも見て取れた。しかし、それを裏付ける証拠は、住民の証言や民俗研究者、関係者による断片的な記述以外には得られなかった。K里のような農村地域でも、門中活動や儒教的な祭祀・儀礼に関する記録は、かなり古いものまで残されているが、このような民俗ノリを行なった記録やその演じ方を文字化して後世に伝えるようという意識は極めて希薄であったようであり、K里住民によるSクツの記録は殆どない。入手し得た記録は、K里が民俗研究者の目に触れるようになってから以後のものだけであった。

したがって、Sクツの演じられ方を記述するにあたって、確実な拠り所とできるのは筆者自身による直接の観察しかない。この項では、Sクツが行なわれるようになってから色々な時期に生じた色々な変化が、あるものは調和し、あるものは調和しえずに残っているような現在のあり方を、できるだけ実態に忠実な形で描く。そこから変化が確定しうる要素やその判別が難しい要素を除いた部分をもとに、次章で「民俗」としての再評価や国有化にさらされる以前にクツが置かれていた社会的・文化的脈絡について考えてみたい。

Sクツは、政府・郡・文化院の各種刊行物や民俗研究者の記述、新聞・雑誌の記事では、「南原Sクツノリ *Namunon Skut-nori*」とこの名称で

言及されることが多い。また、毎年の行事の際に配られるパンフレットやポスターにも同様の名称が刷られている。しかし、筆者の耳にした限りで、K里の住民のほとんどは「Sクツ *Skut*」という名称を用いており、「南原」という広域的な地域名称やノリという接尾詞を付けて呼ぶようになったのは、むしろ近年に至ってのことであるようだ。特に後者は、民俗研究者が巫俗などの宗教的な儀礼（これもクツを呼ばれる）と區別するために、その娯楽性の高さに注目してノリ（遊び）という接尾詞を付けるようになったものではないかと思われる。よって、本論では、村での言い方に従ってSクツという名称を用いて記述分析を進めることにする。

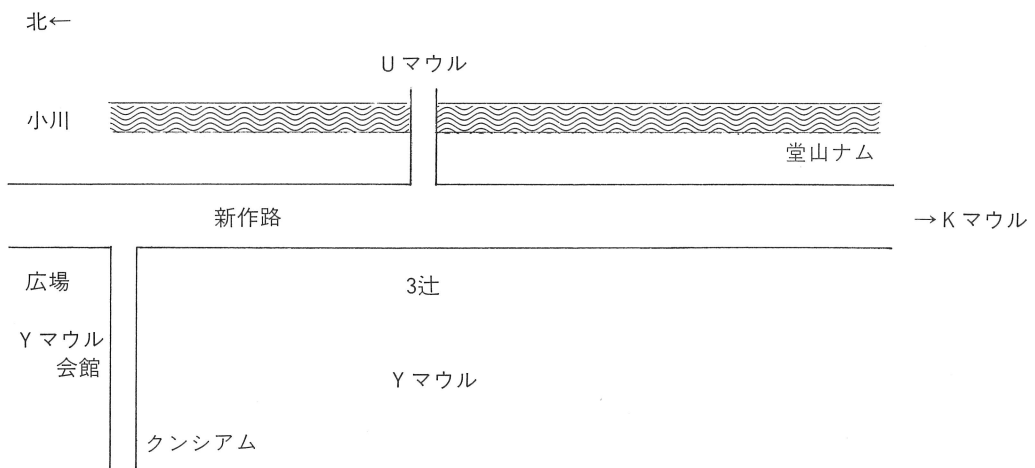
Sクツの準備は陰暦七月七日の七夕という農事名日（伝統的に農作業を休む日）に始まる。Yマウルではこの日スルメギ *sul-megi* という行事が開かれる。スルメギとは、村の成人男子が仕事を休み会館に集まって、酒を飲み、ご馳走を食べ、一日遊ぶという行事で、七夕に限らず、流頭（陰暦六月六日）や人日（陰暦一月七日）など、他の農事名日にも行なわれている。その際の酒食の費用の大半は、現在、マウル（*maul*：自然村落、あるいは行政里）の運営資金から供出されているが、特に流頭や七夕には、マウルの有司（その年の世話役）に現金（額は決まっていない）を手渡す者もいる。Yマウルの住民は、このお金をチャンウォルリ *changwon-ri* と呼んでおり、かつては、現金で支払うものではなく、作男を抱えているような富農やその年の作柄が良い農家が自らの家庭で仕込んだ酒や食べ物を供出するものであったという。

他の名節のスルメギとは違い、七夕のスルメギの際には「龍旗生日 *yonggi*

seung-il」といふ儀礼を行なう。まず、Yマウルの会館の前にマウルの農旗（旗には青字に飛龍の絵が描かれており、Yマウルの村人は「龍旗」とよんでいる。また、旗竿の高さが大人の背の数倍あり、単に力の強さだけではなく、要領が分かっていると持ち上げることができない）を立てて、風物の楽器をもった四人程の人たちが、龍旗の前に酒杯一つ、箸一對と簡単なおつまみ（キムチ程度）を載せた膳を据える。そして、旗の前で農樂を演奏した後、酒杯に濁酒（マッコリ）を注いで拝礼をする。この儀礼には、K里、Yマウルの象徴で、Sクツの上演にとつても不可欠な龍旗を祀ることによって、Sクツの成功を祈願するという意味が託されていると推測される。その後龍旗は、Sクツの当日であるペクチュンの日まで、同じ場所に立てたままにしておかれ、K里住民や近在の村の住民たちにSクツの開催が近いことを知らせてくれる。

七夕の日には、Sクツの練習も兼ねて、K里住民は思い思いに農樂の楽器をならしたりもする。また、近年ではそれ以外にも、Sクツやペクチュンの行事開催の準備がなされる。まず、Yマウルの堂山ナム（図2-1参照）の近くには、道路（「新作路」）の上を横断するように横断幕が張られる。これは町の業者に作らせるもので、中央に大きく「南原Sクンノリ」と書かれ、上下左右に行事の開催回数や開催日時、および場所が記される。予算があれば毎年新しく作り直すか、前年に使ったものを回数と日時だけ書き直してそのまま使うこともある。この横断幕は南原市内とP面各村落を結ぶ新作路を行き来するバスの利用者の目に当然触れることになる。年によっては、K里内の目立ちやすい場所や南原市内の随所に印刷されたポスターが張られることもある。特に一九九〇年

図2-1 Yマウル周辺地図



には、全国民俗芸術競演大会出場時のチネバブキ（後述）の様子を写したカラー写真を中央にあしらったカラー印刷のポスターが作られた。しかしその後はこのポスターの開催回数と日付の部分に紙を貼って再利用している。この他、少なくとも一九九四年の行事の際には、南原地域の有志や関係者に事前に招待状が送られた。

ペクチュン当日の行事の準備は、前日の陰暦七月一四日、ないしは当日の早朝から始められる。三マウルの住民がYマウルの会館に集まって、Sクツ保存委員会の役員の指揮下に、堂山祭の供物や当日の食事の準備、クツの上演に必要な道具の点検、ならびに道路や堂山、共同井戸の掃除と会場の設営を行なう。供物や食事は、南原市の市場で買ってきたものを婦人が手分けして調理するが、豚だけは近在の農家から買い求めたものを屠殺の技術を持つ男性がつかす。その頭は蒸して堂山祭の供物に使い、内臓や肉はゆでて当日の食事にする。九二年からはこの豚の骨を煮てスープを作るようになった。農村が貧しかった頃は、Sクツのよくなマウルの大きな行事の時でさえ肉の入った食事は食べられなかったというが、近年ではSクツの際には豚を一頭つかすのが習いになっている。クツの上演に必要な農楽の楽器や農旗などの道具は、以前は三つのマウルで別々に管理していたというが、保存委員会の結成（一九八三年）以後はYマウルのマウル会館にまとめて保管してある。全国民俗芸術競演大会に出場したときに作られた大道具、小道具もここに一緒に保管してある。会場の設営は、八八年、八九年の場合は、寄付金受付用の机をYマウル会館前に置き当日の午前中に開かれるシルム（民俗相撲）大会用の土俵を簡単に作る程度であったが、九二年からは、Yマウル会館前

の広場に近くの国民学校から借りてきたテントを張り、そこに本部と来賓用の椅子を並べるようになった。また、この年から来賓、観客に饗応する食事を準備するためのテントも広場の前に設営されるようになった。シルムの土俵もわざわざ砂を盛った立派なものが作られるようになった。さらに、九三年、九四年には（後述するように郡の援助を受けるようになって）一般観客用のテント席が設けられ、演壇とマイク、スピーカーも設置された。

当日の午前中には、シルムや綱引きなどの競技が行なわれる。八九年には三マウルの児童から比較的若い成人までの男性が世代別にシルムの対抗戦を行ない、女性は二組に別れて綱引きを行なった。九〇年にはこれに加えて砂の入った俵を持ち上げる重量挙げの個人戦も行なわれた。九二年は三マウル対抗のシルムと綱引きだけが行なわれた。九三年と九四年は、シルム競技の成人の部のみP面一円の法定里対抗（P里には所属しないがK里に隣接する二法定里も含む）という形にして参加者の範囲を広げた。これら競技の勝者には賞品が準備されるが、シルムの成人の部優勝者の賞品は特に立派で、例えば八九年は子牛一頭、九四年は脱水機一台が用意されていた。

Sクツの上演は昼食を食べて少し休んだ後、大体午後二時過ぎから始まる。一旦自宅に帰っていた村人がYマウルの会館前の広場に三々五々集まり出した頃農楽の前奏が始まり、クツの進行の指揮をとる保存委員会会長が適当な時間を見計らって整列するように号令をかける。三マウルの住民と不足人員を補うために雇われた人々は三つの組に分かれ、農楽隊を先頭にし両班、チョリチュン、大砲手、ピソンなどの雑色はその

後に続き、チネ役の婦人たちが最後尾に並ぶ(表2-3 役割表参照)。この二つの組は、それぞれ三つのマウルに対応するものであり、それを考えて保存委員会の役員が予め組分けと配役を決めてある。しかし、Sクックの上演に必要であるとされている人手が九〇年で一三九名、九四年度で一三三名と三マウルの体の動く大人のほとんどが参加する必要がある反面、先に述べたように三マウルの人口にかなりの差があり、さらには各役割に必要とされる技能や資質を持つ者の分布も決して均等ではないため、自分の所属するマウルには対応しない組に振り分けられる者もかなりいる。

整列後に三組が移動を開始するが、九三年と九四年の場合にはその前に記念式典が開かれ、保存委員会会長の挨拶の後、何人かの来賓が挨拶をした。挨拶をした来賓は、郡守の代理、農協組合長、P面選出の郡議会議員、前国会議員など、地域と関係のある政治家、有力者であった。九四年には南原選出の現職国会議員も見物に来ていて挨拶を求められていた。

表 2-3 Sクック配役表

(1990年度、ならびに1994年度の配役表をもとに作成)

チメ名 <i>chimaemyōng</i>	主な役割	人員数		備考
		1990	1994	
スエー <i>soe</i>	ケンガリ <i>kkwaenggari</i> という金属製の打楽器を担当。	1~2	1~2	
チン <i>ching</i>	チンという銅鑼に似た金属製の打楽器を担当。	1~2	1~2	
長鼓 <i>changgo</i>	長鼓という太鼓を担当。	2~3	2	
小鼓 <i>sogo</i>	小鼓という小型の太鼓を担当。	5~6	3~4	
両班 <i>yangban</i>	両班に扮し、堂山祭では祭官を担当。	1	1	老人
チョリジュン <i>chorijung</i>	僧侶に扮し、腰にぶら下げた袋の中に小鼓・チンの槌、おもり、フサ、並びに童子に必要な物品をいれる。	1	1	
大砲手 <i>tep'osu</i>	猟師に扮し、背中にナップザックを背負う。	1	1	
龍旗 <i>yonggi</i>	龍旗、農旗の旗手。	1	1	力の強い若者
令旗 <i>yōnggi</i>	黒地に赤で「令」と書かれた小さな旗を持って行進する。	2	1	
産母 <i>sanmo</i>	三童ソギの際にスクラムの上で童子を支え動かす。	1	1	
童子 <i>tongja</i>	舞童。三童ソギで産母に支えられて色々な動作をする。チネバプキで文官、武官、ソンビに扮し人橋の上を歩く。	1	1	小さい男の子
中童 <i>chungdong</i>	三童ソギの際に最下層でスクラムを組む。	3	3	力のある若者
タク <i>talk</i>	チネバプキの際に2人1組で人橋の両側から棒を渡し童子を支える。	2	2	
祝官 <i>ch'ukkwan</i>	堂山祭の際に祝文を読む。	(1)	(1)	漢籍の知識のある老人
ノレ <i>norae</i>	チネバプキの歌を先導する。	(1)	(1)	
指導 <i>chido</i>	全体の進行を指揮。	(1)	(1)	保存委員会委員長
補助 <i>pojo</i>	三童ソギの補助。	1	1	
ピソン <i>pison</i>	産婆に扮し三童ソギの際に童子の安産を祈願する。	2	1	老婆
チネ <i>chine</i>	チネバプキの際に人橋を作る。	c.12	14	婦人

(特に断りがない場合は男性。タクは鶏、ノレは歌、チネは百足の意。人員数は組毎、ただし()は全体での数字)

整列の後、Yマウルの組はその場に残り、Uマウルの組はその堂山ナムのある場所に、Kマウルの組はYマウルの堂山ナム前に移動する。Kマウル組のみは対応するマウルまでは行かないが、三組の移動した場所の位置関係は、三マウルの位置関係とほぼ一致している（図2—1地図参照）。すなわち、Yマウル組は北、Uマウル組は東、Kマウル組は南にある。移動が終わるといよいよSクツが始まる。

①旗歳拝 *kisebae*

Yマウルのマウル会館と堂山ナムを結ぶ道のほぼ中間点から、Uマウルへ小道が伸びている。この三辻に会長が立ち笛を鳴らすと、三組の行列が農楽の演奏にあわせて踊りながら、この辻に向かつて行進を始める。三組の行列が出会うと、U、Kマウル組の農旗（白地に「農」の字が大きく書かれている旗）の旗手がYマウル組の龍旗に対してそれぞれの旗を三度傾け、それに対してYマウルの龍旗が返礼をする。この、いわば各マウルを象徴する旗同志の挨拶は「旗歳拝」と呼ばれており、兄のマウルであるYマウルの龍旗に対して弟のマウルであるU、Kマウルの農旗が挨拶をするという意味が込められているという。

②堂山祭 *tangsanje*

旗歳拝を終えると、三組の行列は一団となって農楽を演奏しながらYマウルの堂山ナムに向かう。堂山ナムの前の平たい石の上には、予め、栗・なつめ・干し柿、季節の果物、「湯」（魚介類を入れた汁物）、魚、干し鱈ないしはするめ、菓子、豚の頭などの供物が並べられ、蠟燭が灯ざれている。一団は堂山ナムの前を回りながら農楽を演奏しひとしきり踊った後、演奏を一時やめる。そして、三人の両班が供物の前に並び、内の

一人が香を焚き、酒杯を供える。別の一人が祝文を読む。両班三人が一団に再拝をして祭祀を終えると、再び農楽が演奏され、一団は再び堂山ナムの前を回りながら舞う。

③ウムルクツ *umutkut*

堂山祭を終えると、三組はそれぞれ令旗、農旗を先頭にして三列に並び、農楽を演奏し踊りながらクンシアム *kin-siam*（「大きな泉」という意）と呼ばれている井戸に向かう。この井戸の水は、水質が良く日照りや干ばつがひどい時でも水が枯れることがないという。ここには米を入れたバガジが置かれ、中に火を灯した蠟燭が立てられ紙幣が添えられる。また、水を入れた器も置かれる。一団がここに到着してひとしきり農楽を演奏した後、大砲手が井戸の水をすくって飲む。そして、「ア—ッタ（感嘆詞）、この水は美味しいなあ。ゴクゴク飲んで、息子を産み、娘を産み、若芽汁にご飯を混ぜて食べよう」と叫ぶ。その後回りの何人かも水をすくって飲む。

④三童ソギ *sandong-sogi*

一団は今度はYマウル会館前の広場に向かう。広場中央に数メートル間隔で三本の柱が一行に立てられる。この柱を結ぶ形で一列の繩が渡されており、そこに赤唐辛子や、松・竹の枝が突き刺されている。ピソソンの老婆たちがその片側に藁一束、白米の入った容器、水を入れた器および干しワカメをのせた膳を供え、手を揉んで祈る（ピソソとは本来は手を揉んで祈る行為を意味している）。反対側では、三人一組のチュンドン三組がスクラムを組み、その上に産母役の男性を一人ずつのせる。さらに、産母役の男性は、童子を肩の上に立たせる。そして、その童子を

両手で抱える、脇の下をくぐらす、背負う、股の下をくぐらす、両手で高く持ち上げるなどの動作によって、母胎の中で胎児が遊ぶ、胎児を分娩する、産まれた子供が成長するといった過程を描写する。そのあいだ、農楽隊は農楽を演奏し、チネ役の女性たちは列を作って踊りながら周囲を練り歩く。

⑤ チネバプキ *chine-balpki*

三童ソギが終わると、今度はチネ役の女性たちが一列になって、腰を屈め、前の女性の腰を両手で抱えて人橋を作る。この人橋の上を、文官、武官、ソンビに扮した三童子が、タクが渡した棒に支えられながら歩いてゆく。最後尾に付いていた女性は、三童子が上を通り過ぎると人橋の先頭に回り、人橋は果てしなく前に伸びて行く。以前は、橋の袂からはじめて、小川沿いにYマウルの堂山ナムに至るまで続けたというが、近年は広場から少し道路にはみ出たところで終わってしまう。一方、他の人たちはこの間チネバプキの歌をうたう。

⑥ ハブ（合）クツ *hap-kut*

再び列をなして堂山ナム前に移動する。ここで農楽を演奏し皆で踊る。⁽⁸⁾ひとしきり騒いだ後、見物人に挨拶をして終わるが、九〇年にはさらに堂山脇の精米所、堂山前の商店、およびその年の始めに家を改築した農家を回って農楽を演奏し、酒食をこ馳走になった。これはマダンクツ *madang-kut* ないしはマダンバプキ *madang-balpki* と呼ばれていた。また、九三年と九四年は、ハブクツの終了後、見物客に配った引換券の抽選をした。

以上、七夕のスルメギから前日や当日朝の準備、当日午前中の競技を経てSクツの上演に至る一連の非日常的な時間の流れを素描したが、そこから分かるようにSクツは単なる娯楽的な見せ物ではなく、農村の他の行事と密接な関係を持ち、農民の生きる時間の流れや生活空間の中に位置付けられている行事である。次の章では、Sクツが農事暦に占める位置や民間信仰との関わり、並びにSクツの演目を構成する諸要素の社会的位置について検討した上で、かつてSクツが置かれていた文化的、社会的脈絡を、農民階層の文化と両班的な大伝統の並存という構図で捉えなおしてみたい。

三 固有性の基盤…農民の文化と両班の大伝統

「われわれ固有の民俗」という、自意識形成の萌芽ともいえるような語りの対象とされる以前、Sクツの固有性はどのような社会的、文化的脈絡の中に成立していたのであろうか。チネバプキとともにSクツのクライマックスをなしている三童ソギは、K里以外の地域に例を見ないK里独特のものであるという点で、「K里固有のもの」という言説を正当化する一つの基盤になりうる。しかし、Sクツを構成する他の要素のほとんどは、K里に限らず朝鮮半島南部の農村地域にかなり広く見られたものである。さらにいえば、三童ソギが生み出された社会的、文化的脈絡でさえ、K里以外の地域の住民にとっても充分共有しうるものであった。この章では、Sクツの演目を構成する諸要素―旗歳拝、チネバプキ、三童ソギ、農楽と堂山祭―やそれが行なわれる時間―ペクチューン―のよってたつ社会的、文化的基盤の性格を整理した上で、それがかつてのエリー

トの上位文化（両班の大伝統）から見て、どのような位置付けをされていたかを明らかにしよう。

三― 南部地方の農村民俗

〈旗歳拝〉

旗歳拝は、漢江以南の農村地域で主として行なわれていたという（民俗学会一九九四・四三〇）が、その詳細が特によく報告されているのは全羅北道益山の事例である。文化公報部の委嘱を受け、韓国文化人類学会が一九六九年度に施行した全羅北道民俗綜合調査の報告書に収録されている梁在淵の報告（梁在淵一九七一・四六〇―七）によれば、旗歳拝とは、主に年の始めにマウルの象徴である農旗を先頭に立て、近隣諸村落の農楽隊が一堂に会する場で、マウルの序列に従い農旗を垂れて挨拶をする儀式をいう。「歳拝」（年始の挨拶）という呼び方が示すように、年の始めに行なわれることが多いが、京畿道廣州では七月ペクチュンに同様の行事が行なわれていたといい、年の始めではないペクチュンに旗歳拝が行なわれるのは、決してK里にのみ限られた慣習ではなかったようだ。また、近隣村落間の序列関係が旗歳拝を行なう前提となっているが、K里の場合でも、由縁は定かではないがYマウルが三マウルの中心村落であるという意識が住民の間に強く抱かれており、特にYマウルとUマウルの関係についてはしばしばYマウルがクンチブ（本家）でUマウルがチャグンチブ（分家）であるといういい方がされる。金堤や南原については、序列をめぐって喧嘩となった時に、相手方の農旗の竿頭にさしてある雉の尾を奪うことによって勝負を決したり（金堤）、互いの農旗

をぶつけ合って折れた方が負けになる（南原）ような娯楽行事があったという報告もあるというが、筆者もK里の長老から、かつてマウルの序列をめぐって喧嘩となり一方の農旗が折られてしまったため旗歳拝が一時期中断していたという話しを聞いたことがある。

〈チネバブキとキワバブキ〉

チネバブキ *chine-balpki*（*chine* はムカデの意。 *balpki* は「踏む」という意味をもつ動詞 *palphta* の名詞形）の本来の名称はキワバブキ *kiwa-balpki*（*kiwa* とは瓦の意）であったようで、特にK里の老人にSクツの話しを聞くと、チネバブキのことをキワバブキという者が多い。一九四一年に朝鮮総督府調査資料としてまとめられた『朝鮮の郷土娯楽』（村山一九四一）によれば、当時、瓦踏、ないしは瓦踏遊び（原語はキワバブキ、キワバルキ、ないしはキワバルキノリ *kiwabalpkirion*）という遊びが、全羅南道を始めとし、全羅北道、慶尚南北道、忠西南道、京畿道のいくつかの郡で行なわれていた（ただし、慶北安東の場合のみ、同様の娯楽行事をノツタリパリキ *nottaribalpki* と呼んでいる）。やり方はいずれも腰を屈めて一列に並んだ人たちの上を誰かが歩いていくというもので、Sクツのそれと大差はない。また、キワバブキが行なわれる時期は、全二九例のうち正月（含、正月一五日）が一二例、秋（含、秋夕、秋の月夜）が一四例、春ないし夏が四例、冬が一例、随時が五例で正月と秋が圧倒的に多く、また秋夕（八月の満月の日）や月夜など月がよく見える日に行なわれることが多かったようである。Sクツのキワバブキが行なわれるべくチュンも夏の満月の日であるので、この点でも他の地域のもの

類似した性格をもっている。ただし、他の地域ではこのノリがいずれも子供、ないしは婦女子によって行なわれていた反面、Sクツのキワバプキは全国民俗芸術競演大会への出場以前には成人男性によって行なわれていた。

キワバルキのうちで特に詳細な報告があるものは、慶尚北道義城や全羅北道井邑・任実に伝えられるキワバルキと慶尚北道安東のノッタリバリキである。これらはいずれも陰曆正月十五日に婦女子たちによって行なわれていた。そして、昔、王と王女が戦乱に遭い避難する途中で川を渡ろうとしたところ、村の少女たちが腰を屈めて人橋を作り、王女を渡してくれたという史実に由来するという話しが共通して伝えられている（任東権一九九一・四九九一五〇〇）。一方、Sクツのチネバプキの由来については、Yマウルが背にしている鶏籠山とUマウルが背にしている菓山の風水地理的な形状がそれぞれ鶏とムカデであり、ムカデは鶏に害を及ぼすとされているので、ムカデの悪い気を制圧するためにその姿を模した人橋を踏みつけるようになったという話しが、現在公式見解として語られている。キワバプキに風水地理的な説明が付けられている例は他の地域には見あたらないが、このような説明がされるようになったのはさほど古いことではないよう⁽⁹⁾で、既存の慣行に風水的な由来説話が後で付けられたものと思われる。

〈三童ソギと産神信仰〉

童子の母胎内での動きや誕生、成長過程を動作で描写するような芸能は韓国では珍しいが、一名の肩の上にもう一名が立ち、さらにその上に

もう一名が立つという要領で作られた三層、ないしは五層の人塔の最上層に幼い童子が立って舞を舞うという、いわゆる舞童タギ *munjong-tagi* という演目は男寺党などの農楽に見られるようである（cf. 봉천놀이마당 一九九四）。一方、老婆が藁や白米、水、干しワカメを供え手を揉んで祈るという行為は子供の誕生や成長を司る家神サムシラン *samsirang*（産神）を祀るものであるといい、やり方も、後述するように名節の早晩に各家庭で主婦がサムシランを対象として行なう儀礼と似通っている。さらにこのような産神信仰は、かつて朝鮮半島に広く見られ、米やワカメ（ただし、米は炊き、ワカメは普通汁にする）、生水という供物も、産神に対するものとしては特に珍しいものではない。よって、三童タギは、類似した芸能が他の地域に見られないながらも、その成立背景は朝鮮半島の農村に共通するものである。

三―二 農楽と堂山祭

全羅北道の農楽は、現在大きく二つに分けて捉えられている。東の山間部（鎮安、長水、茂朱、任実、淳昌、雲峰、全州）で行なわれていた農楽は湖南左道クツに分類され、西の平野部の右道クツに比べて服装がわりあいに簡素で全員がチョルリプ（*chollip* 陣笠）をかぶり、節や動作が速いものが多く、団体的演技に重きをおくと特徴付けられている。また、全体的に慶尚道の農楽と相通ずる点が多く、パングツ（一定の場で演じられるクツ）以外のクツは殆ど見られないという（姜漢永一九七一・四三四―四四〇）。『南原地方文化財地表面調査報告書』によれば、南原は左道クツの分布地域にはいっており、確かに東北部山間地域は嶺南農

楽との関連が強く見られるが、西南部平野地域とその隣接地域（P面はここに含まれる）ではむしろ右道クツとの関連性が強くみられるという。その証拠として、チベ *ch'ibae*（楽器の演奏者）の服装にチオルリプだけではなくコツカル *kokkal*（僧帽）が多く混ざっており、節もゆっくりしているという（全北大學校博物館一九八七・一五九）。音楽に関しては門外漢である筆者にとってK里の農楽の特徴を記述することは手に余るが、服装はスエー（表2—3 参照）がサンモ（*sangmo*、チオルリプの一種）をかぶる反面、他のチベはコツカルをかぶっており、確かに右道クツとの関連性を見て取れた。また、節や動作もさほど速くは思えなかった。一方、団体的演技がほとんどである点は左道クツの性格を表しているように思えた。いずれにしろ、農楽隊の行進、堂山ナムの前での演行、ウムルクツ、マダンバプキは、左道右道を問わず、湖南農楽に広く見られる演目である。

また、堂山ナムというマウルの守護神の象徴を祀る祭儀に、儒礼の影響を強く見て取ることができ、堂山祭と非儒教的な農楽の演行が併存している点や、堂山祭の終了後にマウルの共用施設である井戸や精米所（個人所有であるがK里住民はみなここに精米を依託する）をめぐってクツを行ったり、また各家庭を訪問してクツを行なうことは、湖南・嶺南地方で堂山祭と総称されているマウル単位の祭祀に一般的に見られる特徴である（李鍾哲一九九一・二一八）。

ただし、堂山祭の日取りに関しては、ペクチュンという例は、これら南部地方の他の地域にはほとんど殆ど見られない。一九三六年の朝鮮総督府の調査によれば、全羅南北道、慶尚南北道で行なわれていた堂山祭

九五例のうち、七八例が一月に行なわれている。それ以外の場合でもすべて九月、一〇月、ないしは一二月に行なわれており、七月を祭季とするものは一例もなかった（村山一九三七・四一四—五）。また、一九八七年の全北大學校博物館による南原地方地帯調査の報告でも、南原地域に現在残っている堂山祭二七例（ちなみに一九三六年の調査では、南原郡の現行部落数は六六であった）のうち、一月、それも一日から三日、ないしは一四日から一五日の間のいずれかの日が祭日であるものが二三例とその殆どを占め、あとは七月（K里）、一〇月、十一月、十二月がそれぞれ一例ずつあるのみであった（全北大學校博物館一九八七・一二九—一四五）。K里でも本来は別の日に堂山祭を行なっていたようで、実際Yマウルの古老によれば、以前は一月一五日にも堂山祭を行なっていたという。さらに、一九八七年度の調査によれば、堂山祭が行なわれる時間帯もほとんどの事例で深夜であり、昼間に行なわれるペクチュンの堂山祭は異例のことである。以下は多分に推測によるところであるが、K里のペクチュンの堂山祭は、Sクツというペクチュンの娯楽行事に結び付けられてこの日にも行なわれるようになったのではないか。ちなみに、日帝時代から解放後の混乱期にいたる生活の困窮下での遂行の難しさや産業化の過程での発展を阻害する迷信という名目での排斥により、上にあげた数字にも現れているように堂山祭を行なう村の数が次第に減っていく中でK里の堂山祭が生存しえた一因がSクツとの抱き合わせであったとも考えられる。その点興味深いのは、全国民俗芸術競演大会に参加する以前には、後述するように堂山祭がキワバプキの後に行なわれていたと考えられる点である。現行の様式を見る限りでは、堂山祭は、旗歳

拌に始まり三童ソギ、チネバブキでクライマックスを迎え、合クツによって締めくくられるSクツの一構成要素に過ぎないが、それ以前はSクツの核心的な演目とは一応は区別して行なわれていたと思われる。

三―三 ペクチュンの性格

陰曆七月一五日ペクチュン (*paekchung*: 漢字では、百中ないしは百種と表記される) は中元とも呼ばれ、『東国歳時記』によれば僧徒はこの日、齋を設けて仏を供養したとあるが、農村ではむしろ稲刈りを前にした夏の最後の休日という意味合いが強かったようである。K里の住民によれば、この日は流頭、七夕、秋夕、重陽などと並ぶ農事名日の一つで、農作業を休む日であった。稲作の神がその年の作柄を決める日であるのでこの日の朝には田畑に行かないともいう。またこの日にはモスム (*mosum* 作男) にも休みを与え、「富者」や作柄のよい農家から酒食(チャンウォルリ)を徴収し、スルメギを開いたという。Sクツはこのような休日に行なわれる娯楽の一つであった。K里の古老の一人は、Sクツが行なわれるようになった理由を説明して、「農民は腹の減った歴史が長かった。それでも農作業をしなければならぬ。腹が減っているから仕事が出来なくさくなる。ある人物が現れて、クツ、農楽でもならして、このようなことでもやったのだろう。(Sクツは) 農夫たちが農作業をするのに対し、やる気を仰揚したものだ」と筆者に語った。また、K里の老人の中には、Sクツを普段には見られないとても楽しい見せ物という者も多い¹⁰⁾。ペクチュンが稲作農耕と密接に関連する休日で、その日に色々な娯楽が行なわれることは別にK里に限ったことではない。全羅北道だけを例

にとつてみても例えば益山郡では、この日に一名ホミシッキョン (*homisikkyon*: 掘鎌 *homi* 洗いの宴会) という、農作業がすんだことを披露する宴を開く慣行があった。全州では、畦道をきれいに片付け、この日を期にもう田圃に入る必要がなくなるとして踵を白くきれいに洗うというので「白踵」(この漢熟語も *paekchung* と発音される) ともいったという。

また、益山郡では、スルメギを開き、井戸や道路の掃除をし、麻繩をなつて綱引きをしたり農楽を演奏したり、チャンウォンノリや人を牛に乗せる遊びをしたという。鎮安郡についてもこの日にスルメギを行なうという記述があり、次のように農楽をならし作柄が良い家を回りチャンウォルリを出せとせがんだという。それは梯子の上に俵を敷き作男を乗せ、村人がそれを担ぎその主人の家に入り、農楽をならしながら酒をせがむ。主人は農楽隊をできる限りもてなすというものであったという。普段とは違い、作男がもてなされる点に関しては、全州でこの日を「作男の名日 *mosum myong-il*」と呼ぶという報告もある(李杜鉉一九七一・四八八―九)。

他の農事名日と同様に、ペクチュンの日には各家庭で主婦によって様々な神が祀られていた。K里の場合、日の出る前に各家庭の主婦が、ソニョン *sonyong* (その家庭で祀る祖先)、ソンジュ *songju* (家の守護神)、サムシランなどの諸神に対して供物をそなえ、手を揉みながら祈るといふ慣習があった。セマウル運動が推進される過程で、ある時期からこれが「迷信」であるといわれるようになり、現在では殆ど行なわれなくなっているが、筆者は八九年のペクチュンの日に彦陽金氏のある家庭で一回だけこれを見ることができた(この家の主婦は、自分は「旧式」だから

まだこのような儀礼を守っていると語っていた。その家庭では、ソニョンとソンジュに対してはご飯、清水、肉、ブツチンゲ（チジム）、野菜のあえ物、果物を供え、特に、ソニョンのご飯は、その家で儒礼の祭祀をあげている祖先の人数分並べられていた。サムシランに対してはこれとは異なり、ご飯と清水、果物のみが供えられていた。また、後者に対しては、オルゲシムニ *olgesimni* ⁽¹¹⁾ の稲藁も供えられていた。別の老女の話しでは、サムシランに対する供えものは、他の供物とは別に床の上にご飯を敷いてその上に並べるものであるというが、この家では特に区別せず、他の家神への供物と一緒に一枚の板の上に並べられていた。ピソンの終了後、ポニャン *ponyang* と呼ばれる腹の減った鬼神に食べさせるために、供物の残りをマル *maru*（この地域では縁側を指す）においた。

三十四 農民の階級文化と両班の伝統

以上の記述から、Sクツを構成する演目の由来やSクツのような娯楽行事（ノリ）が行なわれるペクチュンという名節の性格は、朝鮮半島、特に南部地方の農村に広く見られる慣行に立脚していることがわかる。ここで再び固有性について人類学的に問直せば、Sクツは朝鮮半島南部地方の農村に見られる土着的（native）な文化であるということも可能であろう。

一方、K里の住民の間には、それとは別の系統の文化伝統もかなり堅固に存在している。今日K里に居住しSクツの上演に直接携わっている者の大半、特に *dominant* な三姓氏の者は、農業を生活の基盤としてはい

在地士族に列せられていたような人たちであった。その伝統を受け継ぐ三姓の人たちは、儒教的と語られているような社会規範や礼儀作法、儀礼様式に、現在も強い執着を抱いている。

しかし、先にも述べたように、両班の出自を持つ者のうちで、行動様式（行実）の上でも両班と自他ともに認められる者はその一部であった（cf. 拙稿一九九三・一五九）。そのように名実ともに両班といえる人たちは、堂山祭の祭官や祝官をつとめこそすれ、農楽の演奏や三童ソギ、キワバプキの実演といった体を動かし汗をかく役割を担うことには拒否感を抱いていた。儒教・漢籍の素養を備えた在地の知識人で、回りの人から「学者 *hakcha*」と呼ばれている古老の一人は、Kクツについて次のように語った。K里の両班といわれる三姓の子孫のうちでも本当に両班といえるのは一〇%にも満たず、それ以外の人たちは農業をやっていた。そのような農業をやっている人はSクツに参加したが、「Sクツは両班とは関係ない。両班の家では（子弟に）農楽をやらせようとしなかった。自分の祖父は、（子弟が）農楽をやらせようとすると、モッスンダ *mot-sunda*（良くない）といって怒った」という。すなわち、彼のいう意味での両班は、チャンウォルリを出したり自分の家で働く作男を参加させるなどの形でSクツの行事に協力はしていたが、実際に自らSクツに参加することはなかったと考えられる。

その意味で興味深いのは、農乐的なSクツと儒礼に則った堂山祭が、以前はかなり区別して行なわれていたと推測できる点である。堂山祭で祝官をつとめるような者は、漢字で書かれた祝文を読める位の素養がなければならぬ。現在の祝官は祝文の漢字の脇にハングルで読み方を表

記したものを読んでいるが、この祝文は彼の前に祝官をつとめていた者が書いたものを使い回しているという。彼の前の祝官は、儒教・漢字の素養が深いいわゆる「学者」で、地域の儒林との親交も篤く、郷校に出入りしてその掌議をつとめたことさえある人物であった。このような人物と、Sクツに農楽隊の雑色として登場する両班との間にはかなりの距離がある。

確かに、このような名実ともに両班であるとは見なせないが、茶祀、忌祭祀、墓祀といった儒教的な祖先祭祀には欠かさず出席し、三綱五倫といった儒教的な社会規範の重要性を説く人たちでさえ、彼らの究極の人間像を体現しているような人たちから見ればあまり高級とはいえないような農民の気晴らしを、現在、自慢気に語るのにはなに故であろうか。一方には、筆者が別稿で論じたように、祖先の墓の整備作業などを通じて地域社会におけるステータスの上昇を狙う農民の「両班化」(cf. 末成一九八七)志向を見ることも可能であるが(拙稿一九九三・一五九)、本論の趣旨に沿っていえば、「民俗」の再評価や民俗文化の国有化による旧来の価値観の相対化、ないしは部分的な転倒を見て取ることもできる。先に引用した古老のSクツに対する評価も、このような精神分裂的な状況を両班文化の伝統の側から非難したものと解釈することも可能である。また、そこからK里にかつて存在していた社会秩序、あるいは社会的な斉一性(consistency)の揺らぎを見ることもできよう。

論点をかなり先取りしてしまつたが、次章では国家の産業化によって引き起こされた農村社会の内的な揺らぎと、国家机关や民俗学者・都市住民など、外部の主体による再評価という二重の契機によって、K里に

おけるSクツの伝承のあり方が劇的に変化する様子を検討してゆこう。

四 農村社会の変容とSクツの再評価

四一 農村の変容

Sクツが民俗研究者によって「発掘」され、「韓国固有の民俗芸術」という評価をうけるようになる一九八〇年代始めまでのあいだに、Sクツの固有性の基盤であった農村は相当な社会変化を来すにいたつていた。まず、過疎化という点では、一九六五年から七九年までの一四年間でK里の世帯数は一一・三%、人口は二五・〇%減少した(表2-1参照)。特に、以前Sクツの主たる演者であった作男、貧農、小農や出自が両班ではない農家は、都市部での就業機会の増加に乗じて、かなり早い時期に農業に諦めをつけて離村していったようである。例えば、以前には富農の家に一、二名いた作男はこの頃までには殆ど見られなくなったという。一方、離農者の増加により、耕地の供給も相対的に増加した。これに加えて農薬、化学肥料や多収穫品種が導入され、一九七〇年代中盤から米の収量が飛躍的に増加したため、農村でも全体的に生活水準が上昇し春窮期に食べ物に困るようなことも次第に少なくなつていった。また、それにともなつて米穀を貸す時の利子率や小作料も低くなり、地主・富農といえども以前のようなけだまりの蓄財は難しくなつていった。

このような農村の社会、経済的な変化は、Sクツを行なうことの意味、機能にも少なからぬ影響を及ぼしたと思われる。まず、持つ者から持たざる者への財の再分配という性格をもつチャンウォルリは、貧富の格差の減少や作男の消滅により以前ほど切実な必要性はなくなつていったで

あろうし、卓越した富農の消滅によりこのような再分配のシステム自体の維持が難しくなっていたであろう。そして、全国民俗芸術競演大会出場を期にチネバプキの人橋役を男性から女性に変えた理由の一つにもあげられているように、Sクツを上演する人手も次第に求めにくくなっていった。事実、大会参加直前までに、行事の規模はかなり縮小されていたという証言もある。さらに、韓国の産業化の過程で、経済発展を善とする価値観が農村にもかなり浸透し、Sクツの基盤にあるような在来の信仰を「迷信」として排斥するような気運も強くなっていった。

一九八〇年代以後は、それ以前を上回るペースでK里の離農・過疎化が進行し、農村人口の老齢化も深刻になっていった。一九七九年から一九九〇年までの一年間でK里の世帯数は三〇・四%、人口は五八・五%減少し、五〇歳以上の人口はYマウルを例にとれば八九年で全人口の四三・九%を占めるに至った。それ故にSクツを上演するための人手の不足は、一九七〇年代末頃と較べてはるかに深刻になった。しかしそれ以上に痛手となったのは、農家の自己再生産のシステムが崩壊したことであろう。二章一節で述べたように、単に長男夫婦が父母と別居して農業を継ぐことが少なくなったこと以上に、息子の誰かしに農業を継がせるといふ選択がなされること自体が現在稀になっている。これは親が現在K里に住みSクツの上演に携わっていても子の世代ではその上演にはおそらく携わらないであろうことを意味し、Sクツの上演に必要な技能を下の世代に教えこむことが疎かになるといふ結果を招くものである。実際、Sクツの上演に必要な役割のなかで最も熟練を要するものの一つであるスエーの技能伝承が、現在ほぼ断絶状態にある。スエーの技能保

有者は一九八三年の時点で外から動員された三名を除き六名いたが、一九九四年までにこのうちの二人が高齢のために引退し、また、三人がソウルに転出して、現在もK里に居住して毎年の行事でスエーをならす者はわずか一人しか残っていない。彼自身七〇歳近い高齢者である。さらに、彼以外に現在K里住民でスエーをならせる者はなく、近くに住む任実筆峰農楽の技能保有者やその弟子の助けを仰いでやつとスエーの演奏者を確保しているのが現状である。

このようにSクツの固有性の基盤に目を向ければ、Sクツを行なうことの意味、機能が失われ、その規模が縮小し、仮に消滅するに至ってもそれは必然の理であろう。機能主義的な観点にたてば、このようなSクツが農村の社会システムの自己展開に寄与するところは少なく、またそのようなSクツを廃することを悪と糾弾する主張はなんら科学的根拠をもちえない。しかし、実際は官によっても民俗研究者によってもまたK里住民自身の一部によってもSクツの「保存」が叫ばれ、いくつかの施策がとられようとしている。まさにそこにはSクツの「民俗」としての発掘と国有化という契機が介在している。

四―二 民俗としての再評価と国有化への契機

「審査委員は、このノリがこの地域に自生した純粹で素朴な民俗芸術である」と高く評価した」（『朝鮮日報』、一九八二年一〇月二九日）

一九八〇年前後、Sクツは全州の大学に籍をおくある民俗学者の目にするところとなり、彼を通じて民俗学界や地方官庁に広く知られるよう

になる。筆者が探し得た限りで、Sクツに言及している最初の文献は、慶熙大学校民俗学研究所主催で一九八二年九月一日に開かれた郷土祝祭シンポジウムの報告書である（慶熙大学校民俗学研究所一九八二）が、この報告書では全北地域の郷土祝祭の代表例としてSクツがとりあげられている。¹² 離農、過疎化が本格化しつつある一方で、農業を除けば特に目立った産業のないK里の住民にとって、Sクツが民俗研究者や地方行政当局の注目をあびるようになったことは、Sクツの宣伝を通じて国家的な脈絡で自分たちが住む村の威信の向上を図るという選択肢が新たに登場したことを意味していた。K里の住民たちはこの選択肢を活用することを選んだ。Sクツを「発掘」した民俗学者とK里住民の有志が協力して郡・道当局に働きかけ全国民俗芸術競演大会に全羅北道代表として出場することが決まると、男性九〇余名、女性四〇余名、合計約一三〇名にのぼる出演者は、九月始めから一〇月下旬まで、稲の収穫期にかかる忙しい時期であるにも関わらず大会のための練習を繰り返した。そして、全国民俗芸術競演大会では、審査委員から「構成とリズムが卓越し、この地域に自生した素朴な民俗芸術」（『全北新聞』一九八二年一〇月二八日号より）であるという高い評価を得て、出場した一九種目の中の総合最優秀賞である大統領賞を受賞した。

全国民俗芸術競演大会とは、一九五八年に大韓民国政府樹立一〇周年記念行事としてはじめて開催された、官が主催する韓国各地の民俗芸能の競演大会である。当初はこの一回で終わる予定であったが、公報部（後の文化公報部）によって新たに「民族の先人たちが作り上げた民俗芸術を全国的に発掘しこれを保存し生成する」（任哲宰一九八二：一二二）と

いう趣旨と目標が設定され、一九六一年から年例行事化された。「民俗芸術（folk art）」といっても、実際に出場できるのは農楽、民俗劇、民俗ノリの三部門（のちに、民謡と舞踊が加えられる）に該当するもの、すなわち音楽的、ないしは演劇的な性格の強い演行（performance）に限られており、巫俗儀礼、喪葬礼などの民俗儀礼や美術・工芸といった演行的でないジャンルは含められていなかった。

この大会を通じて一九八九年第三〇回大会までに総計二五〇種目の「民俗芸術」が発掘、復元され、その内の三四種目が国家指定重要無形文化財に、二〇種目が市・道指定無形文化財に指定されるなど、この大会が官の主導による「韓国固有の民俗芸術の発掘、保存」事業の中心的な役割を担ってきた点については民俗研究者・関係者によっても高く評価されている（任哲宰一九九一：四四六―七）。反面、その弊害を指摘する声も強い。例えば、韓国民俗学界の長老である任哲宰は、この大会の弊害について次のように述べている。

「この大会は回を重ねるにつれ、発掘、保存、育成とは異なり、授賞（受賞の誤りと思われる）を目標とする競演大会に瓦解していった。この大会に出演する種目の選定は道の担当者の責任に帰され、入賞することができる種目は何で、どのようにすれば入賞するかという点に重点が置かれ選定されたものが多く演じられた。そのせいで、演者の衣裳は五色絢爛な緞子の服となり、必要以上の人員が動員され、高校生を動員して代演させ、さらには職業演芸人を雇用し出演させる事例さえ見られた。民俗ノリが最高賞を受ければその次の年には民俗ノリを出演させる道が多く、民謡が最高賞を受ければ

民謡の出演が多くなった。このような現象は伝承された民俗芸能が内包している特異性と興趣とモツを正しく演ずることを不可能にし、(民俗芸能を)見せかけだけの形骸演戯にしてしまった」

(任哲宰一九八二・一二三、括弧内は筆者による注と補足)

特に、制限時間内にできるだけ強い印象を観客に与えられるように、従来の構成や演目に手を加えたり、必要以上に参加人員を増やす(マスメーム化)など民俗芸能を恣意的に作りかえ、さらに本来それが置かれていた文化的、社会的脈絡、すなわち固有性の基盤から切り離して、その外での「公演」が可能な見せ物に変えてしまう危険性については広く指摘されるところである(cf. 韓国文芸振興院一九七七・一七)。さらに、このような公演演目化は本来の場における当該芸能の演じられ方にも少なからぬ影響をおよぼす可能性を含んでおり、本論で検討しているSクツの現在の演じられ方にもその徴候を見て取ることができるといえる。

まず、この大会への出場準備の際に、任哲宰のあげた例ほどではないが、以前のやり方にある程度手が加えられた形跡がある。Sクツの大統領賞受賞を報じた『全北新聞』には、その発掘者である全州の大学の民俗研究者が「体系を整え」、全北大の教授が振り付けを担当し、藝総全支部の関係者が農楽の指導や効果指導にあたった事実が、彼らの実名とともに記されている¹³⁾。K里の住民たちの話しでも、全州から来たという先生が「昔はこうやったに違いない」といってSクツに手を加え「改良」してくれたという。その当時の記録は残されておらず、今となっては実際に誰の発案で改変されたかを知ることができないが、K里の住民から聞いた限りでは、次のような点が大会出場を機に変わった。

・配役毎に統一した衣裳や小道具が作られた。

・風物用の楽器が整えられた。

・K里の外での公演用に、張りぼての堂山ナムや井戸、繩を渡した

竹の棒などの大道具が作られた。

・キワバブキの人橋役が男性から既婚女性に変更され、以前より多

くの人員を動員するようになった。

・Sクツと同じ系統の農楽(湖南左道クツ)の技能保有者が動員されるようになった。

この他に、振り付けや農楽の指導が行なわれたことから考えて、人によってある程度差があった楽器の演奏の仕方や踊り方に、ある程度模範となる形式が定められたことが推測される。

そして、この頃を境にSクツの演目の構成にも手が加えられた。大統領賞受賞を報じた『全北新聞』によれば、大会では堂祭、ウムルクツ、三童クツ、チネバブキ、マダンバブキの順序で各演目が遂行された。しかし、それ以前は堂山祭を行う前にウムルクツ、三童クツ、キワバブキが済まされていたようである。さらにSクツとはこの堂山祭の前に行なわれる娯楽性の強いノリを指していたようでもある。一九八七年度の南原地方文化財地調査の報告書に収録されているK里の二人の村人(ともに当時五〇歳程度)の証言によれば、ペクチュンの行事は、かつて、「旗人事」とYマウルの「クンセム」でのクツ↓Sクンノリ↓堂山までチネバブキ↓きれいな成人男性が祭官となって堂山祭↓飲福↓一日楽しく遊ぶという順序で行なわれていたという(全北大学校博物館一九八七・一三七七八)。Sクツが大統領賞を受賞した大会以前に開かれた郷土

祝祭シンポジウムの報告書にも、Sクツが以前、「Sクンノリ(三童ソギ)、チネバプキ、堂山祭の順序」(慶熙大学民俗学研究所一九八二・一五)で行なわれていたことが記されている。さらに、一九八四年の郷土祝祭協議会の調査報告書では、各マウルでの農楽団の演奏↓Yマウルでラツパ手がラツパを吹く↓農旗や令旗を先頭に立ててキルノリ↓三叉路に集まり、U、Kマウルの旗がYマウルの大きな旗に三回拝礼をすると、Yマウルの旗が答礼をする↓Sクンノリ↓三童がチネの上を歩き堂山まで進む↓堂山祭を行ない、その後飲福をし濁酒を分け飲み祝祭の雰囲気高めめる↓マダンバプキ(農事がうまくいった家や三童に選ばれた者の家を順番に回り、農楽をならすと、家の主人が酒とつまみを出し、興が高まる。一晚中楽しく遊び、明け方近くなってやつと終わる)という順序でペクチュンの行事が行なわれていたとしている(郷土祝祭協議会一九八四・一一二―一二)。後の二つの報告にはウムルクツについての記述はないが、三童ソギ、ならびにチネバプキの終了後に堂山祭が行なわれていたとする点は、始めの報告書の記述と一致している。¹⁴⁾

以上のような演じ方の「改良」は、郷土祝祭調査報告書の表現を借りれば、「見栄えがよいように、進行において便宜性を強調し、大型化を図ろうとする意図」(郷土祝祭協議会一九八四・一二四)によるものであろう。衣裳を統一し、楽器、大道具、小道具を揃えることで見栄えはよくなるし、技能保有者を動員すればより洗練された音楽を奏でることができる。男性だけでなく女性も出演させることによって、当然規模は大型化するであろう。さらに、堂山祭を序盤に持つてくることで、見せ物的には最も面白い三童ソギとチネバプキがクライマックスとなり、それが

マダンバプキ(ないしは合クツ)によって締めくくられるという、より劇的な効果を期待できる構成になる。反面、その様式を村にそのままち帰って毎年のペクチュン行事でも同じような演じ方をするようになれば、逆に村での上演自体も見せ物に墮してしまふ可能性を含んでいる。実際、Sクツの一部に組み込まれてしまった堂山祭では、以前は儀礼の主宰者であった祭官や祝官も芸能の一登場人物に化してしまった。葬式にでたり、悪いことをしたり、犬の肉を食べたりするような不浄は避けねばならないといった禁忌事項や当日の朝に齋戒沐浴をする必要性がSクツの祭官や祝官について語られることもあまり聞かれなくなった。

二章二項で見たように、K里でのペクチュン行事にも現在この作りかえられた様式が導入されている。大統領賞の受賞は、作り替えられた形式の方に正統性を付与する結果となり、大学の権威ある研究者によって「改良」され、大統領領によって表彰されたこの形式が、年によって完全に再現することが難しいことはあっても、ほぼそのまま定着したものと思われる。また、南原春香祭などの外の行事に動員されるようになった。民俗学者が「過熱した競演大会や地方の行事の度に動員され演じて見せることによってノリを維持してゆこうとすれば、民俗ノリ元来の機能が破壊されるばかりでなく、歪曲と変型によって原形が失われるという深刻な問題に直面するであろう」(郷土祝祭協議会一九八四・一二四)¹⁵⁾という批判をしても、前項で述べた農村社会の変容により、以前のやり方に戻すことはSクツの消滅を招く恐れのあるものである反面、見せ物的な公演演目化することによって、次の項で述べるような以前にはなかった利益を得られるようになった。Sクツの伝承は、このような総体的な

状況の上に現在辛うじて成り立っているのである。Sクツの伝承の再確立を目指すのであれば、「原形」云々というようないたずらに復古的な言を弄するのではなく、このような総体的な状況を問い直さねばならない。

四一三 郷土祝祭への変貌

全国民俗芸術競演大会への出場と大統領賞の受賞は、K里の住民たち自身にとってもSクツを再評価するきっかけとなった。名実ともに両班であるような者たちから見ればさほど高級とはいえない農民の娯楽行事であり、一九七〇年代以後農村に急速に浸透した発展イデオロギーに照らし合わせれば発展の阻害要因とも目されかねない「迷信」に根ざした信仰的行事であったSクツが、一民俗学者によって中央に紹介され、さらに全国大会で「この地域に自生した素朴な民俗芸術」という評価を得ることによって、一転してK里住民の多くにとっても何かしら良い価値をもつものであると捉えられるようになった。そして、Sクツを今後とも続けて行なって行かねばならないという意識がK里住民自身によっても抱かれるようになり、Sクツに直接携わる者のあいだで伝承の問いなおしが急浮上してきた。

そのような動きが具体的な形として現れたものが一九八三年のSクツ保存委員会の結成である。⁽¹⁶⁾それからは、この保存委員会の管轄下で、毎年ペクチュン行事の準備運営やK里外での公演の遂行、官庁やマスメディアへの対応、Sクツ保存策の検討のみならず、それまで各マウル毎に行なってきた風物の道具（楽器、農旗他）やSクツの小道具、大道具の管理が一括されるようになった。この保存委員会の構成員は漠然とK

里三マウルの住民とされているが、実際の業務の遂行は、委員長（一名）、副委員長（一名）、総務（二名）、財務（一名）、監査（二名）、計六名の役員にほぼ任されている。これらの役員はいずれも会員間の互選によって選出される。定期的な総会は年一回、年末に開かれ、この場で会計決算と次期役員を選出、ならびにSクツの保存に関する諸問題が討議される。この総会は「Sクツカリ *Skut-kari*」と呼び慣わされている。

しかし、財源を見る限り、保存委員会はK里住民の自律的な組織であるとはいえない。そして、財源の確保を代償に、Sクツを含むペクチュン行事の行なわれ方にも変化がみられるようになった。現在、ペクチュン行事の開催経費を含めた保存委員会の経費は、文芸振興院から毎年ペクチュン行事に対して交付される補助金、南原郡からの不定期の補助金、住民や見物客からの寄付金などによって賄われている。この中でも特に文芸振興院からの補助金に依存するところが大きい。この補助金制度は、文芸振興院が「伝統性、歴史性に縁由する地域固有の民俗ノリとして全住民が参与し楽しむことができる代表的な郷土祝祭」を九道、ならびにソウル特別市、仁川直轄市の計一市・道毎に一件ずつ（ただし、全羅南道のみ、コサムノリ祝祭と海南カンガンスルレ郷土祝祭の二件）選出して交付しているもので、一九八三年度に創始され、一九九二年度を例にとれば一件につき一律三〇〇万ウォンずつの金額が支払われている（文化部一九九二・二二二・一九九三）。この補助金をもらうためには行事前に申請書を提出し審査を受ける必要があり、行事終了後にも報告書を提出しなければならぬ。申請時には最近の行事資料として行事ポスター、パンフレット、写真などの各種印刷物や新聞記事を添付することが必須

とされている(韓国文化芸術振興院一九九四)。それ故に、二章で述べたように、保存委員会では毎年のペクチュン行事の際にポスター、パンフレットを作り、また、写真屋を雇って行事の模様を写してもらっている¹⁸⁾。

財源の確保にともなうペクチュン行事の作りかえの内でも、特に興味深いのは、「郷土祝祭」という名目で公的な補助金を受けることによって、ペクチュン行事の進行に官製の型がはめられ、さらにK里住民がSクツを、公演会場であるK里に「観客」として来た見物人に見せるためのための見せ物として演じるというような傾向が助長されているような様子を見て取ることができる点である。「郷土祝祭 *hyangto'oh'ukhe*」(あるいは郷土文化祭 *hyangto'munhwaje*)とは、韓国民俗学では通常一定の地域を単位としてその住民によって行なわれる共同体的祝祭行事を意味する語として用いられており、例えば、洞祭などもその範疇に含まれるようであるが、行政担当者の側でこの用語が使用される時にはむしろ比較的新しい時期に始められ、一定の構成を共有する現代的な地域祝祭行事を意味することが多い。このような行事類型は、大体一九六〇年代のはじめ頃から韓国各地で見られるようになり、一九七〇年代になって急速に全国に普及した。おおむね官主導的に運営され、行政区域が単位となつて、「地域社会に伝わる固有の民俗文化・芸術の継承、歴史的イベントの記念・追慕、ないしはその精神の継承」などを名目とするが、その行事内容は、概して本行事(行事の趣旨に関わる民俗芸能、祭祀、儀礼、記念式など)、民俗文化的な各種行事(農楽、相撲、ブランコ、弓道、民謡、時調、唱劇、その他の国楽、綱引きなど)、並びに非民俗的な行事(仮装行列、提灯行列、作文大会、美人コンテスト、写生大会、花火、各種体

育競技、美術展覧会、詩画展、雄弁大会など)の三種の要素から構成されており、かつて行なわれていた民俗行事とはかなり様相を異にしている点が指摘されている(Cf. 張籌根一九七七、金相坤一九九二、申瓚均一九九四)。

少なくとも全国民俗芸術競演大会に出場する以前は、このような郷土祝祭的な行事類型の枠をはめようとする試みはなされていなかったようであるが、公的な補助金がおきるようになってから毎年のペクチュンの行事が次第に官製の「郷土祝祭」的な体裁をとるものに変わっていった。すでに記したように、一九八九年のペクチュン行事までには、行事が午前の部と午後の部に分けられ、午前の部がSクツの前哨行事と位置付けられ、三マウル対抗のシルム大会や婦人の綱引き、成人男性の重量挙げなどが行なわれるようになっていた。さらに、一九九三年に南原郡の補助を受けるようになってからは、行事次第に記念式典やP面法定里対抗シルム大会、幸福券抽選などが付け加えられた上に、「会場」に観客席や音響設備を設け、南原郡の有志を招くなど、郷土祝祭的な様式がより強く意識され、K里住民以外の南原郡民の参加も広く募られるようになった。

このような変化の中で、ペクチュン行事のクライマックスであるSクツの演行自体も、マウルの安全を祈願するとともに自らが楽しむために行なうというよりも、むしろ行事会場に詰めかける観客や報道関係者に対して権威ある大統領賞を受賞した芸能を演じてみせるという意味あいが強くなっている。受賞時の規模を確保するために、農楽隊の組分けとマウルへの帰属の一致にあまり拘らなくなった。堂山祭の祭官や祝官も見

栄えがよいように顎に紐製の白いつけ髭を付けるようになった。ペクチュンが近づくと、「今年は○○日報（新聞）の記者が取材しに来るそうだ」「○○放送局から取材への協力依頼があった」などといったことが村人の間でしきりに語られ、取材されることがSクツを演ずる熱意を高めるようにもなった。実際取材に来た新聞、雑誌記者や放送局のディレクターの要求には最大限応じ、頼まれるままに色々な芸を演じてみせる。

さらに、ペクチュン行事やSクツを運営する財源の多くを外部、特に中央の公的機関や郡に依存するようになったことは、社会的には、チャンウォルリの再分配のシステムの前提となっていた富者や農事の成功者対貧農、小作農、作男という序列関係が農村社会の変容によって崩れたのみならず、それが産業化や国民国家の形成によって新たに中央・都市対地方・農村という序列関係によってとってかわられたことを意味している。このような新しい構図は単に（エティクナ）説明モデルという形で提示できるばかりではなく、農村の住民自身によっても、現実を解釈する（エミックナ）モデルとして用いられている。彼らの間では、（国家の中枢に近い）都市と（国家の中枢から隔てられた）農村の生活水準の格差は強く意識されている。農村の過疎化の要因を説明する際にK里住民がしばしば「都市に移住した者は皆良い暮らしをしている」というように、格差の度合いの認識は、時には現実の経済水準の格差を上回ることさえある。それは、ペクチュン行事の際に（公のお金で）ご馳走や酒をふんだんに準備し飲み食いする事を正当化する論理にもなっている。時にはこのような認識が農民の政治批判の根拠にもなる。

Sクツの伝承は、現在このような政治経済的な基盤の上に辛うじて成

り立っているが、韓国農村の現実にはSクツの伝承の現状の維持自体をも危うくしている。すでに現段階でも人手不足、特に技能保有者や特定の役割を果たしうる体力を備えた者の不足によりK里住民だけではSクツを上演することが難しくなっている。先に述べたように、スエーやチャングの演奏者の大半は、現在、任実筆峰農楽の技能保有者やその弟子たちに日雇い賃を払って来てもらっているものであるし、九四年の場合には体力を必要とするチュンドン役（九名、表2-13参照）については、南原郡内に服役する防衛兵を動員してこれに充てた。

もちろん、このようなその場しのぎの対応ではない、抜本的な保存伝承策の必要性はK里の住民たち、特に保存委員会の役員をつとめるような比較的若い世代（四〇〜五〇歳代）の者たちによっても切実に認識されている。その策として比較的早い時期から考えられていたのが、国からSクツを重要無形文化財に指定してもらうことである。重要無形文化財に指定されると、「保存伝承」の名目で、技能の保有者や履修生、ならびに技能の保有団体に対して伝承支援金、奨励金、伝承費、伝授奨学金などの名目で国庫から毎月一定の金額が支払われるのみならず、国ないしは地方行政体の予算で伝授教育館を建ててもらえることもある。伝承教材や伝承装備の製作に対する経済的な支援も行なわれる。また、伝承地での自体公演行事や海外公演に対しても支援金が下りる。文化財管理局によって文字、映像による記録保存もなされる。確かに毎年の行事の開催自体に対してしか支援金が下りない現状に比すれば、重要無形文化財指定を受ければ、官のお仕着せであれ保存伝承のための様々な方策がたてやすくなるであろう。さらに、財源や保存伝承制度が確立されるで

あろうのみならず、Sクツに対する村落社会内外の関心が高まり、人手の調達もしやすくなるかもしれない。

実際、全国民俗芸術競演大会での大統領賞受賞直後に、文化財管理局の委嘱を受けた民俗学者がSクツを調査し報告書ならびに指定建議書を文化財管理局に提出したが、指定は見送られた。村人の話しによれば、後継者の不足、特に風物などの技能保有者の高齢化にもかかわらず後継者の育成が行なわれていないことが指定を受けられなかった一番大きな理由であったという。その他、キワバブキの人橋役を男性から女性に変えたことが「原形」が保存されていないことと見なされたのも理由の一つであったと語る者もいた。南原郡庁文化公報室の担当者によれば、「正統性のある技能保有者」、すなわち小さい頃から父に学ぶなどの形で履修した者がいないこととSクツに関する資料不足が、指定の実現を妨げている大きな要因になっているという。これに加えて、一九八九年年度のSクツカリの席では、当局や関係者に対するロビー活動の必要性も真剣に討議されていた。

これらの問題に対して、例えば、保存委員会は一九九三年の二月から三月にかけて約一か月間、先述の任実筆峰農楽の技能保有者を招いて、毎晩風物の楽器演奏の講習会を開くといった対策を講じてもいるが、目立った成果は未だあげられていない。当初、この講習会には、K里在住の小中高生約三〇名と若い婦人二名が出席したが、最後まで残った者は数名に過ぎなかったようである。演奏が上手であれば奨学金を与えようとの意見も保存委員会では出されたそうだが、残念ながら該当する者はいなかったという。

五 おわりに…国民国家の中の農村の民俗伝承

Sクツは一体だれのものか―現在、Sクツの「保存伝承」を論ずる際にもっとも核心的な問題となるのは、おそらくこの問いであろう。いかえれば、Sクツを演じ、楽しみ、所有する主体がどこにあるかによって、「民俗」として発掘され国有化にさらされているSクツの保存伝承策のあるべき形が違ってくるということである。そして、韓国農村の社会変化のゆく末が見えないこと以上に、この問題に関する統一見解の不在が、現在のSクツ保存策の不明瞭な状態を招いている原因といえるかもしれない。

国家の側に注目すれば、Sクツを国有財産、ないしは国民国家を構成する一地域の財産と主張しながらも、その保存に対する施策は機械的な補助金の分配の域をでない。国民国家の下部機関である南原郡当局や半官半民的な地域文化活性化運動の団体である南原文化院は、Sクツを南原の郷土文化と認定しながらも、地域の郷土祝祭的な行事の際にそれを利用するのみで、具体的な保存策を提示する準備はない。ましてや、郷土文化といわれたところで、K里住民以外の南原郡民は、Sクツに大した関心を持ちえない。一方、K里の住民たちは、国や郡を新たなスポンサーと考え、その意向にある程度までは従うが、ベクチュン行事の運営やSクツの上演にK里住民以外の者の関与を許そうとはしていない。K里の外からベクチュン行事に参加する者は、「ソニンム（お客さん）」扱いしか受けられない。さりとて、今後さらに深刻になるであろう技能伝承の断絶と人手不足に対してその場のぎ以上の解決策のめどがついて

いるわけではない。

現在、郷土芸能を演じ、楽しみ、所有する主体がどこにあるかは、国民国家における広義の政治的な問題である。三章で展開したようにその固有性の文化的、社会的基盤から演繹的に解答が導かれる問題ではなく、国家の中の利害を異にする主体の間の力関係の中でしか解決し得ない問題である。例えば、韓国の安東河回マウルに伝わる仮面劇の場合は、河回マウルの常民にかわり主に都市住民によって構成される半職業的な保存会が技能を伝承する主体となり、国家の援助や公演収入によって財政基盤が維持され、河回を訪れる観光客や公演場に集まる国内外の観客に対して、韓国を代表する民俗として提示されるようになった。また、サークル活動を通じてその技能を学ぶ学生や都市住民も多い(柳貞嬰一九八九)。一方、東海岸の江陵に伝わる江陵端午クツの場合は、逆に地元住民が保存委員会を結成して財政的にもかなりの自律性を維持している(習은辛一九九三)。Sクツの場合は、どっち着かずの状態で、財政を国・郡に大部分依存しながらも、住民はそれをチャンウォルリの新しい形と再解釈し、Sクツの伝承を外に開くことをひたすら拒否している。ざりとて外に開くことなしには、伝承を維持していくことさえおぼつかなくなっている。

民俗文化の国有化が進む現代韓国において、一地域に伝わる民俗文化を何らかの集団に固有の「民俗」であると語ったり、「民族文化」と命名したりすることは、単なる現状の追認ではなく、国民国家という政治・経済的な枠組のなかで、伝承のあり方や伝承母体自体を問い直す契機として作用している。

註

現地語彙の転写はマッキューン・ライシャワー方式による。また、文中にSクツ、K里、Yマウル、Uマウル、Kマウルとあるのは、いずれも仮称である。

(1) 伊藤亜人教授の御教示によれば、一九七〇年代から全国的に展開されたセマウル運動と呼ばれる生活改善運動も、韓国における国民形成の一翼を担ったという。(2) K里の過疎化・高齢化の実態とそれが世帯や家族関係に及ぼした作用の詳細については、拙稿一九九四を参照されたい。

(3) 南原地域への滞在調査は、昭和六三年度文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校へ留学中の一九八九年五月から一九九〇年八月にかけて行なわれた。その後、一九九一年五月に日本に帰国するまでの間に数回の短期調査を行ない、帰国後も文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費、国際学術研究)、韓国文化研究振興財団助成金、財団法人国民学術協会学術研究助成の補助を受けて、二週間から一か月程度の調査を計三回行った。

(4) チャンウォルリのチャンウォン(changwon: 壯元)の原義は、科擧の首席合格者であるが、この場合、そこから転じて農事の成功者を示すものと推定される。

(5) 堂山ナム *tangsannamun* とは、土地や村の守護神が宿るといわれている木(ナム)のことをいう。Yマウルの場合は、かつて立派な槐の木が三本あったというが、現在はこの内の一本のみが残っておりこれが堂山ナムであるとされている。(6) ただし、一九九〇年度だけは、整地用の土が積み上げられていたために広場を使用できず、三童ソギとチネバプキは堂山ナム前の路上で行なわれた。

(7) 歌詞の内容は次の通りである。
(先唱) 三槐亭はわが村、力を込めて百足を踏もつ。

(後斂) オールロールロール、百足を踏もつ。心を合わせて百足を踏もつ。

(先唱) 三綱五倫の礼儀村は、三槐亭ではないか？

(後斂) オールロールロール、百足を踏もつ。心を合わせて百足を踏もつ。

(先唱) 三胎(三つ子) ファアベク(意味不明) 鶏龍山に、霊鶏浴田の大明堂は、

(後斂) オールロールロール、百足を踏もつ。心を合わせて百足を踏もつ。

(先唱) 三政丞が生まれると、今に至るまで言い伝えられてきた。

(後斂) オールロールロール、百足を踏もつ。心を合わせて百足を踏もつ。

(先唱) 三生仇讐のあの百足が、一年中狙っているので、

(後斂) オールロールロール、百足を踏もつ、心を合わせて百足を踏もつ。

(先唱) Sクツを準備して、三童に踏ませよう。

(後斂) オールロールロール、百足を踏もつ。心を合わせて百足を踏もつ。

(先唱) 三十三天兜率天命、あの百足を反伏させ、

(後斂) オールロールロール、百足を踏もつ。心を合わせて百足を踏もつ。

(先唱) 三災八難を退け、三槐亭が復興する。

(後斂) オールロールロール、百足を踏もつ。心を合わせて百足を踏もつ。

(8) 九四年には、最後のハブクツを行なう際に堂山ナム前に移動せず、広場ですませた。

(9) K里の古老の一人は、この風水地理的な由来説は、一九七〇年代後半頃から語られるようになったと筆者に言っている。また、彼を含む二人の古老が、かつてキワバブキの際に歌われた歌詞は、「どこの瓦か。慶尚道(安東)の瓦だ」というものであったと筆者に語った。これは、他の地域のキワバブキの歌詞と類似しており、チネバブキのかつての姿が、他の地域と極めて類似していたことを物語るものであろう。

(10) この点は、K里の村人がSクツをクツという範疇で捉えていることから明らかであろう。このクツ *kuzi* という用語は、ムダン、タンゴルなどの宗教的職能者が執り行う解冤儀礼を意味するものと捉えられがちであるが、実際は、それよりも遙かに広い意味をもっている。K里の村人は、見せ物、ないしは面白そうな催し

を見に行くことをしばしば「クツを見にゆく *kuzi poro handa*」と表現するが、ここでは、その見せ物なり催し物が宗教的である必要は全くない。彼らにとっては、クツとは宗教信仰儀礼・行事に限らず、なにかしら面白い催しを意味しているように思える。

(11) オルゲシムニとは新穀を家神に供える儀礼で、日本の民俗で穂掛に当たるものである。秋夕(陰暦八月一日)、あるいは本格的に稲刈りを始める前に吉日を選んで行なわれる。

(12) ちなみに、そこに紹介されている一〇件の郷土祝祭のうち、Sクツを含む八件が一九八三年に韓国文化芸術振興院によって市道別代表郷土祝祭(詳しくは本文四―三参照)に指定されている。

(13) ただし、この記事には、彼らの行動を批判するような表現は全くなく、むしろ彼らの功を讃えるような書き方がされている。

(14) K里住民の話によれば、河川が整備される前(正確な年代は確認できなかったが、一九七〇年代のようである)には、三童ソギとキワバブキはYマウルとUマウルのあいだを流れる小川の河原で行なっており、橋の近く(K里の北端)で三童ソギを行なった後、キワバブキ(チネバブキ)をしながら堂山ナムまで進んでいったという。地図を参照すれば分かるが、このような順序に従って行なうとYマウルとUマウルに挟まれた河原のあたりをちょうど一周して全行事が終わることになり、現在のように、Yマウルの広場と堂山ナムの間を何回も行き来する

必要はなくなる。

(15) 民俗ノリの現状に対する韓国の民俗学者の典型的な意見の一つとしてこれを引用したのみで、このような主張に筆者が必ずしも同意しているわけではない。民俗ノリが見せ物化されずには存続しえない政治的な状況に対して、「歪曲」、「変型」が望ましくないというような表層的な批判をしてもあまり生産的であるとは思えない。現代韓国の民俗ノリをとりまく政治的な状況に関しては、정은주一九九三が興味深い分析をしている。

(16) 『全北新聞』一九八二年九月二八日号によれば、全羅北道は、同年から道内の農楽などの民俗ノリ二四種目を保存種目に定め、マウル単位の保存会の組織を始めとする、これら民俗ノリの伝承保存を進めてゆくことを決定した。この二四種目のうちに、Sクツも含まれており、Sクツ保存委員会結成の背景に、全羅北道の指導があつた可能性も考えられる。

(17) ちなみに、Yマウルに残されている文書によれば、Yマウルでは一九六九年に風物契を組織し、以後は、風物が紛失された場合でも、洞里では購入せず、風物契の財産の中で購入することを定めている。この時の風物の目録は、チン一個、ケンメギ(ケンガリ)三個、チャング(長鼓)一個、ソグ(小鼓)七個、手拭い三九個、農旗一個、鈴一個である。

(18) 九二年の百中行事の際は写真屋を頼み忘れたため、保存委員会委員長から依頼を受けて筆者が代わりに行事の様相を撮影した。その際、Sクツを演じる人の写真だけでなく観客が多く写った写真がないと文芸振興院の方から文句をいわれるという話しをされた。官の考えている「郷土祝祭」とは、観客の存在をぬきには考えられない、まさに公演用の見せ物を意味するようである。

参照文献 (アルファベット順)

Anderson, Benedict

一九八三 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of*

Nationalism, Verso Editions and NLB: London. (邦訳: アンダーソン

ン・ベネディクト一九八七、白石隆・白石あや訳、『想像の共同体』ナ

シヨナリズムの起源と流行』、リブポポート)

張壽根

一九七七 『郷土文化祭の現代的意義』、『韓國文化人類學』一〇: 五一—七一

朝鮮民俗學會(編)

一九三三 『朝鮮民俗』第一號, 서울

全北大學校 博物館

一九八七 『南原地方文化財地表調査報告書』、全北地方文化財調査報告書 第六輯、

全北大學校 博物館: 全州

정은주

一九九三 『향토축제와 전통의 현대적 의미』, 서울대학교 대학원 문학석사학위

논문

春香文化宣揚會(編)

一九九二 『春香祭六十年史』, 春香文化宣揚會: 南原

Foster, Robert J.

一九九一 'Making National Cultures in the Global Ecumene', *Annual Review*

of Anthropology, 20: 235-60.

韓國文化藝術振興院

一九七七 『特輯 郷土文化祭』、『月刊문예진흥』四(五): 一一—二八

一九九四 『一九九五년도 문예진흥기금사업-진흥신청안내』, 한국문화예술진흥원: 서울.

Hobsbawn, Eric and Terence Ranger (eds.)

一九八三 『The Invention of Tradition, Cambridge U. P.』

本田 洋

一九九三 「墓を媒介とした祖先の(追慕)——韓国南西部一農村におけるサンイルの事例から——」, 『民族學研究』五八(二): 一四二—一六九.

一九九四 「韓国家族論の現在——全羅北道南原郡一山間農村の事例から——」, 『朝鮮學報』第一五二輯: 一〇九—一六六.

洪錫謨(姜在彦訳注)

一九七一 「東国歳時記」, 『朝鮮歳時記』, 東洋文庫一九三, 平凡社.

郷土祝祭協議會

一九八四 「郷土祝祭 調査報告書 二차년도」, 郷土祝祭協議會: 서울.

李杜鉉

一九七一 「歳時風俗」, 文化財管理局一九七一: 四六八—四九四.

一九八三 「序論」, 李杜鉉·張壽根·李光奎一九八三: 一三—三四.

李杜鉉·張壽根·李光奎

一九八三 『韓國民俗學概説(改訂版)』, 學研社: 서울.

李鍾哲

一九九一 「堂山祭」, 『한국민족문화대백화사전 6』, 한국정신문화연구원: 서울.

二二七—八.

任東權

一九九一 「기와받기」, 『한국민족문화대백화사전 4』, 한국정신문화연구원: 서울.

四九九—五〇〇.

任哲宰

一九八二 「全国民俗競演大会、앞으로의 方向」, 『文藝振興』九(六): 一一二—

五.

一九九一 「全國民俗藝術競演大會」, 『한국민족문화대백화사전 19』, 한국정신문화연구원: 서울: 四四六—七.

伊藤亜人

一九八五 「現代韓国における文化・社会」, 伊藤(編)一九八五: 二六一—一八九.

伊藤亜人(編)

一九八五 『もっと知りたい韓国』, 弘文堂.

伊藤亜人·関本照夫·船曳建夫(編)

一九八七 『現代の文化人類学 1 親族と社会の構造』, 東京大学出版会.

姜漢永

一九七一 「音樂과 舞蹈」, 文化財管理局一九七一: 四三四—五九.

金相坤(編)

一九九二 『春香祭六〇年史』, 春香文化宣揚會: 南原.

慶熙大学校 民俗學研究所

一九八二 「郷土祝祭의 새로운 檢證」, 慶熙大学校: 서울.

민속학회(民俗学会)

一九九四 「한국민속학의 이해」, 민속학회: 서울.

문화부(文化部)

一九九二 『우리나라의 문화행정 一九九二』, 문화부: 서울.

文化財管理局

一九七一 『韓國民俗綜合調査報告書(全羅北道篇)』, 文化公報部 文化財管理局:

서울.

一九九四 『文化財管理年報』七、文化財管理局…서울.

村山智順

一九三七 『朝鮮の郷土神祀(第一部)部落祭』、調査資料第四十四輯、朝鮮總督府.

一九四一 『朝鮮の郷土娛樂』、調査資料第四十七輯、朝鮮總督府.

봉천노리마당

一九九四 『민속 교육 자료집』(주)우리교육…서울.

柳貞燮

一九八九 『河回탈노리의 意味變化 — 마을 “儀禮”에서 지역 “表象”으로 —』、

서울대학교 대학원 문학석사학위논문.

関本照夫

一九九四 a 「序論」、関本・船曳(編)一九九四…五—三二.

一九九四 b 「影絵芝居と国民社会の伝統」、関本・船曳(編)一九九四…六七—九

三.

関本照夫・船曳建夫(編)

一九九四 『国民文化が生れる時 — アジア・太平洋の現代とその伝統』、リブプロ—

卜.

申瓚均

一九九四 『향토축제의 현대와 미래』、『향토축제의 가·양성과 미래』, 『반영문화연구』

재단.

末成道男

一九八七 『韓国社会の『両班化』』、伊藤他一九八七.

梁在淵

一九七一 『演戲』、文化財管理局一九七一…四六〇—七.

To Whom Does S-kut Belong ?
—One Aspect of Folk Tradition in a Present-day Korean Farm Village

HONDA Hiroshi

S-kut is a form of folk entertainment that is performed by the inhabitants of K-ri, an agrarian mountain community in the southwestern part of Korea. S-kut originated from folk customs and beliefs native to southern Korean peasant villages and continued to be enjoyed mainly by the local peasantry on the traditional holiday called *Paekchung* (the 15th day of the seventh lunar month). It was performed under the sponsorship of successful farmers or rich landowners. However, since the 1960s heavy industrialization and expansive urbanization of the Republic of (South) Korea have brought about a gradually eroding socioeconomic base for supporting rural folk traditions. In the case of S-kut, it became more and more difficult to maintain the system for recruiting its performers and redistributing a part of the community's surplus product to its preservation. The annual performance of S-kut was in danger of extinction.

Then, among the growing urban population, especially modern intellectuals, a movement arose to discover anti-modern spiritual, aesthetic, or utilitarian values in traditional folk culture, which may be summed up in the word "*minsok*". Power elites of the nation-state in South Korea began to appropriate various elements of native folk culture from their original contexts in an effort to reconstitute them into a national culture, which they called "*minsok-munhwa*". S-kut was one of those elements.

At the time when S-kut was "exhumed" in this fashion and introduced to the public by a professional folklorist, two ambivalent factors mentioned above --- local and national --- were activated in relation to Korean folk traditions. For example, at the annual National Folk Art Contest S-kut was awarded first prize as a representative folk art form of the province to which the village of K-ri belonged.

Since then, both the manner and context in which S-kut was performed changed tremendously. Its composition was rearranged for the Contest, making into a public performance art rather than a form of folk entertainment prize. This reconstituted form has come to be performed for audiences who attend K-ri's *Paekchung* festival, which is now sponsored by state agencies and the local government and covered by the national media.

Today the relatively poor citizens of K-ri, having been incorporated into the powerful nation-state of South Korea, are barely able to carry on their folk entertainment tradition by embodying "*minsok*" anti-modern values (which nevertheless are products of modernity) and thus playing their part in the state enterprise of inventing a national culture.